

■ おすすめ Book

「庭に埋めたものは掘り起こさなければならない」 齋藤美衣著（医学書院ケアをひらくシリーズ）

著者は、自閉症スペクトラム症、急性骨髄白血病、摂食障害という複数の困難を経験し、自殺未遂をきっかけに精神科病院へ措置入院となった。本書は、冒頭で語られる「ありふれた普通の措置入院」から物語が始まる。

警察官に淡々と、まるでベルトコンベアの一工程のように扱われ、誰からも説明がないまま隔離室に収容される。提供される食事の違和感、今が何時なのかさえも分からない。まして、どうしたらここから出られるのか、その手がかりすら与えられない。そんな空白の時間の中で著者が味わった心情が綴られる。

さらに医師とのやり取りでは、「わたしがこれまで『死にたい』という気持ちに何度も襲われたこと、それがどんな種類の痛みであり経験であるかについては興味がないようだった」と感じたという。著者は自分の言葉が届かず、医師の求める言語へと無理に翻訳していく。その過程で、まるで自分の言語が世界に存在しないかのような苦しさが記されている。また、病棟の日常が「ひたすらに待つ」ことで構成されている点にも、著者は強い違和感を抱く。

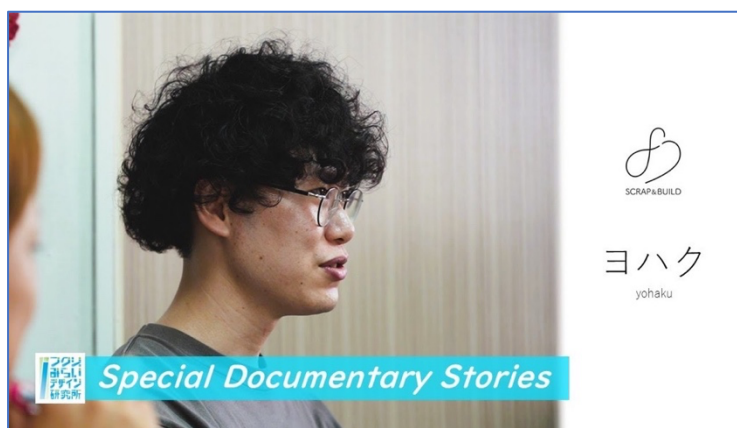
戸田も強く思う。これは決して特異な体験ではない。著者が語る「ありふれた措置入院」は、実際に多くの場面で“ありふれて”しまっている。精神科の強制入院は一体誰のための仕組みであり、何を救おうとしているのか。その根本を問い直さざるを得ない現実がここにはある。精神保健医療に関わる私たちは、この事実と真正面から向き合い、傷ついた人の傷をさらに広げるような構造を放置してはならない。

本書の冒頭の体験記に続き、白血病、摂食障害、自閉症スペクトラム症として生きてきた日々が語られ、第Ⅱ部では「穿ちつづける」というテーマのもとに、著者が自らの傷を見つめ、その痛みを探究してきた過程が記される。それらの思索は、私たちに「回復とは何か」という問いを改めて突きつけ、深い示唆を与えてくれる。



■ YouTube 動画公開のお知らせ！ドキュメンタリー「退院支援」

「精神科病院からの退院支援（地域移行支援）」の取り組みについて、外部の制作チームにより動画として紹介していただきました。私たちの実践がどのように行われ、どのような思いをもって支援に取り組んでいるのかを、現場の映像とともに分かりやすくまとめているので、ぜひご覧ください。



動画は以下の URL から！ ↓

<https://youtu.be/VujTskD47pw?si=oyxgKUSwCqWy9wIxx>